

米国におけるサケ科稚魚への食害対策（ミミヒメウとオニアジサシ） 高木憲太郎・熊田那央（バードリサーチ）

日本では、河川における放流アユへのカワウの食害が特に問題視されています。アメリカにおいても、ミミヒメウによる魚類への食害が問題となっていますが、その多くは湖や海で起きています。日本と同様に河川で問題となっているのは、主に北西部沿岸地域です。この地域では、サケ科魚類の稚魚（天然と放流の両方）がミミヒメウやオニアジサシによって捕食されることが問題となっており、調査や対策が行われています。日本での管理と共通するポイントがありますので、オレゴン州で取材した情報をもとにご紹介します。

追い払いはボート 胃内容物調査が大事

アメリカでは、サケ科魚類の遊漁券収入を国や州が徴収しているため、調査や対策に国や州が積極的に関わっており、調査費や対策費の予算も十分に確保されているようです。また、自然保護団体の影響力が大きいいため、捕獲を伴う個体群管理を行うには明確な調査データが求められ、そのための基礎的な調査に大きな予算が割かれています。

オレゴン州の河川での追い払いは、ボートで追いかけるという方法で行っているほか、ボートが入れない場所では日本と同じく花火による追い払いが行われています。対策を行う際は、できるだけ被害魚種が少ない下流へ追い払う方針がとられています。捕獲の要請も出されていますが、その申請は国から却下されたためまだ行われていません（オレゴン州などでは、それほどミミヒメウが増加しておらず、むしろ、減少する可能性があることが背景にあります）。個体数調整を行っていくかどうかの判断材料として、被害状況を明らかにする食性調査がしっかり行われている段階です。



図1. 追い払いを行っているボート

【オレゴン州立大での空胃個体の避け方】

ミミヒメウの胃内容は、オレゴン州立大学のチームが調査しています。コロニーに戻ってくるところを、射手がボートの上から撃って捕獲しています。捕獲できる個体数は、厳しく決められているため、空胃の個体を捕獲してしまうと、サンプル数が少なくなってしまいます。そこで、飛んで帰ってくる群れの中でも、一番後ろを飛んでいる個体を狙って撃つことで、空胃の個体の割合を下げ



る工夫をしている、ということでした。魚を食べて体が重くなった個体は、飛ぶのが大変だろう、という考えです。この考えが当たっているのかどうかは、まだ調査中のようです。日本のカワウではどうでしょうか？

オニアジサシのコロニーを下流へ

ミミヒメウと同じくサケ科魚類の稚魚を食害しているオニアジサシの食性を調べたところ、コロンビア川の下流部の2つのコロニーの間で、サケ科魚類の稚魚が食べられている割合が異なっていました。より上流にあるライス島のコロニーの方が高かったのです。そこで、Bird Research Northwestという、合衆国魚類野生生物局やコロンビア川周辺の州の野生生物局、地域の権利者などで構成されるこの地域の魚食性鳥類への対策方針を決定するグループによって、コロニーの移転が行われることになりました。ひも張りや追い払いを行うことで、2010年にイーストサンド島にオニアジサシを移転させることに成功しました。その後も、ライス島は、繁殖妨害のためのひもが張ってあること、裸地だった場所に草が生えることで繁殖適地ではなくなり、オニアジサシは繁殖していません。



図2. オニアジサシのコロニーの位置



図3.
追い出しをおこなったライス島のオニアジサシのコロニーだった場所（上）と、現在コロニーがあるイーストサンド島（左）の様子。ライス島では、ロープ張りによってコロニーがなくなり、草が生えてきている。

日本のカワウでも、沿岸にあるコロニーで繁殖する個体は、海や河口部で採食していることが多く、アユを食べている割合は低いと考えられます。コロンビア川でのオニアジサシの管理は、千葉県の実間川でのカワウのねぐらの分布管理と同じ考えに基づいていますが、食性調査に基づいて方針を決定しているところに特徴があります。